



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

韓国語を母語とする日本語学習者に対する相互評価
を取り入れた発音指導：
学習者主体の学習をめざして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, かな メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3395

韓国語を母語とする日本語学習者に対する 相互評価を取り入れた発音指導

—学習者主体の学習をめざして—

伊 藤 かな

要旨

発音指導の方法の1つとして、「自己モニター」を用いるものがある。これは、適切な自己評価を通して自己修正を行うというもので、学習者自身に発音のあり方を意識的にとらえさせ、主体的に発音学習を行うことをめざしている。この自己モニターの考え方をもとに、筆者はクラス内でそれぞれの発音を相互評価させ、学習者自身でなぜそのような発音になったと思うか、どうしたらいいのか考えてみるという発音学習を行った。その結果、学習者から学習項目に対する方略やコメントがいくつか得られた。本稿ではこれらの方略やコメントを報告する。そして、このような方略やコメントが、教師が次にどんな指導をすべきかを考える上で重要な情報となり、また、それをもとに、各学習者にあった指導や今後の指導のアイデアが得られると主張したい。

1. はじめに

筆者は、岐阜大学で2000年の11月から2月にかけて、韓国語を母語とする日本語学習者に対する発音指導を担当したが、その際、問題になったのは「高低差」をいかにつけるか、ということであった。学習者の発音は高低差がなく、平坦なイントネーションになりがちであった(伊藤, 2001)。

佐藤(1995)によると、韓国人学習者の日本語発音を日本語母語話者に聞かせ、評価をさせたところ、高さ・長さ・強さの3つの韻律的要素のうち、高さが日本語らしさに大きく影響するという結果が出た。また、韓国人学習者の場合、アクセントよりイントネーションが日本語らしさに大きく関わっていることが柳(1986)によって指摘されている。

このように、韓国語を母語とする学習者の場合、高低差のない、平坦なイントネーションが日本語らしさに影響し、不自然さを感じさせている。

2001年の11月から2月にかけて、筆者は再び韓国語を母語とする日本語学習者に対する発音指導を担当する機会を得た。そこで、高低差のあるイントネーションで話すことを目的に、シラバスをたて、発音指導を行った。指導に際しては、教師からの一方的な指導にならぬよう、学習者が主体的に行えるような発音指導をめざした。本稿ではその発音指導の内容について報告するとともに、学習者から得られたコメントをもとに今後の発音指導をどうすべきかを考えたい。

2. 先行研究

近年、体系的な音声教育の研究が進みつつある。体系的音声教育とは、文法と同様、音声のルールを習得することによって、初めての文であっても、正しく発音できるようにするための教育であ

る。河野・松崎（2001 a;2-5）は発音指導項目の中でも音の高さや、フレーズの立て直し（ヤマ）¹⁾の重要性を挙げ、「個別ルールが多いアクセントはともかく、他の音調、特にヤマのルールを学習者自身が習得できることが必要」であると述べている。

また、実際に学習者に発音指導を行う際の方法の1つとして、「自己モニター」を用いるものがある。小河原（1997; 93）は「発音矯正が学習者にとって受身的な活動にならないように、学習者自身の発音のあり方を意識的にとらえさせ、学習者の意識の中に正しい発音の『基準』を作らせるような自己評価意識を高める指導が重要となる」としている。そして、適切な自己評価を通して発音を自己修正する「自己モニター」の促進を目指した発音指導を試みている。（小河原 1998, 1999）その結果、主体的に発音学習するようになり、相手による気づきや反面教師として自己改善、自分の発音に対する正誤判断能力が養成されたと述べている。

他に自己モニターを使った発音指導を行ったものに佐藤（2001a;46-47, 2001b;46-47）の実践例がある。佐藤はこの指導法の評価できる点として、「受身的ではなく、能動的な活動であり、学習者に発音改善への意識化を図りやすい」ことを挙げるとともに、問題点としては「戸惑う学習者がいる」「自己モニターができないまま、教師や他の学習者に指摘されるばかりになり、精神的負担を抱える学習者がいる」ことを挙げている。そのため、「自己モニターを分かりやすく例示し、難しさよりも有効性を認識させた後、前向きに取り組めるような環境を作る必要がある」と述べている。

3. 発音指導における留意点

以上の先行研究をふまえ、今回の発音指導では次のことに留意して、授業を行った。

- 1 学習者の動機付けを高めるために、指導前後の学習者の発音を録音・比較し、発音指導の有効性を示す。
- 2 学習者同士で相互に発音を評価させ、主体的に発音学習が行えるようにする。その際、評価札²⁾を用いることで、共通の評価基準を明示化し、学習者の達成感を高める。
- 3 発音が改善されなかった場合、精神的負担を軽くするためにも、教師はしつこく直すことは要求せず、各自のコメントを出すにとどめておく。
- 4 今後の発音指導におけるアイデアを得るために、学習者同士の評価後、なぜそうなったのか、どうしたらいいのか、学習者自身で考えてみる。

4. 対象学習者

今回報告する授業の対象学習者は、初級文法を終了した韓国語を母語とする日本語学習者5名（全員男性）である。この授業を受けるまで、発音に関する特別な指導は受けてきていない。今回の発音指導に関わる要素（高低差）として、学習者の出身地がある。韓国語は慶尚道・咸鏡道方言を除いて、アクセントが意味を区別する機能を持たない。高低の音調変化は一応存在するが、一般にアクセントの違いについての感覚は希薄と言われる。（木村・阪田・窪田・川本 1989;234）そこで、参考までに学習者の出身地を挙げておく。学習者Aは京畿道（仁川）、Bは忠清道、Cは慶尚北道（安東）、DEは慶尚南道（釜山）出身である。

5. 活動内容

発音指導は週2コマ行われ、各コマ20分が発音指導、70分がロールプレイに当てられていた。指導は、2コマをそれぞれ単音と韻律に分け、筆者は韻律の指導を担当した。

6. シラバスと授業の流れ

シラバス及び、教材の作成にあたっては、河野・松崎 (2001ab)、田中・窪菌 (1999)、山本・工藤 (2001)、富坂 (1997)、庵・高梨・中西・山田 (2001) を参考にした。使用した教材の一部を資料1, 2に示す。

6.1 シラバス

上述のように、発音指導以外の70分はロールプレイの授業に当てられていた。そのため、シラバス作成の際には、ロールプレイの内容を考慮した。例えば、「人を誘う」ロールプレイを行うときは、「誘い文」の韻律をシラバスに組み込んだ。

表1 発音指導の授業内容

	授業内容
第1回	あいさつ 名前
第2回	真偽の質問文
第3回	ます形
第4回	誘い文・否定文 (丁寧体)
第5回	誘い文・否定文 (普通体)
第6回	疑問詞質問文
第7回	修飾語句+名詞, 修飾語句+動詞
第8回	Nは～です。Nが～です。
第9回	統語構造とイントネーション
第10回	文末「よ」のイントネーション
第11回	「ね」のイントネーション
第12回	「じゃない」のイントネーション
第13回	感情とイントネーション

6.2 授業の流れ

①その日の発音指導項目について説明

②①の説明にもとづき、クイズ。

(ヤマの数を当てる/どこでイントネーションが上がった, または下がったか当てる/文末イントネーションを聞き, どの意味を表すのか当てる, など)

③モデル文の一斉リピート

(学習者にモデル文を提示する際には, ピッチ曲線かプロソディーグラフ³⁾のどちらかを付けた。)

④各自で発話練習

⑤一人ずつモデル文を2回発話する。○×の評価札を配り、互いにできているかどうか評価し合う。2回目から教師も評価に加わる。×の場合はもう一度繰り返す。

⑥各自にコメントしてもらう。

(自分・他者、どちらに対するコメントでもよい)

7. 授業において観察されたこと

7.1 指導前後の学習者の発音の比較

・第1回の発音指導では「あいさつ」「自分の名前」を取り上げた。来日直後(指導前)に録音した自己紹介と、学習後に録音したものとを聞き比べた。全体的にイントネーションが自然で分かりやすくなっており、これによって練習の効果を確認した。

7.2 学習者同士で評価することについて

・評価札を用いることに関しては、「ゲームのようだ」と学習者のほうから率先して使っていた。本当は「○」の評価なのに、冗談で「×」とする学習者もいた。全員から「○」の評価が出ると歓声を上げ、発音学習をゲーム感覚で楽しんでいたようだった。

・普段からよくできる人に対しては、「○」の判断に流れてしまうように感じた。逆に、あまりよくできない、自信のなさそうな人に対しては「×」の評価が出やすい。

7.3 学習者の様子

第2回 真偽の質問文

学習者C:「寒かったですか」「習いますか」の練習で、「～です」「～ます」を十分下げないまま、上げてしまっていた。

→「×」の評価

学習者Cの方略:「×」の評価を受け、Cは「さむかったです」の「です」の部分を早く言って、次の「か」を上げていた。つまり、音の長さに着目し、音を短くするという方略を用いていた。

→しかし、結果は「×」。

学習者D, E:「テニスですか」「先生ですか」の文で、学習者DとEは「か」の部分が上昇せず、下がってしまっていた。

→「×」の評価

学習者D, Eのコメント:韓国の釜山をはじめとした慶尚道では、質問のときでも文末を下げるから(上昇させるのは)難しい。

このコメントから学習者が音の高さに着目していることが分かる。

→繰り返し練習した後、学習者D, Eともに、文末を上昇させることができた。「○」の評価。

第7回 修飾語句+動詞

学習者全員：「きのうパーティーで先生に会いました」のような文では、高低差が小さく、一本調子だった。

→「×」の評価。

教師の対応：高低差がうまくつけられるように、手で円を描きながら言うように指示した。

→学習者AとDは、より高低差をつけて発話することができ、「○」の評価。

第8回 「Nは～です。」 「Nが～です。」

学習者Bのコメント：韓国語にも「は」「が」にあたる助詞があり、構文も同じ。「Nは～です」に相当する文は、「は」の後にポーズがある。「Nが～です」に相当する文ではポーズがなく、一気に話す。このようなポーズの有無は日本語のヤマの有無と重なる。

第9回 統語構造とイントネーション

・「太郎の犬と猫が逃げた」のように、2通りの解釈ができる文に対して、以下のコメントがあった。

学習者Bのコメント：韓国語でこのような文を言うなら、その部分を強く言って区別する。

学習者Cのコメント：日本語と同様、ヤマの位置で区別する。

第10回 文末「～よ」のイントネーション

学習者全員：上昇調の「～よ（相手に知らせる）」が下降調になってしまう。

学習者のコメント：韓国語も「yo」で終わることがあるが、イントネーションは上昇調と下降調しかない。日本語では上昇調を伴った「～よ」は、相手に何かを知らせる意味をもち、質問にはならない。しかし、韓国語で上昇調を伴った「～yo」は、質問の意味になる。だから質問文ではないのに、文末を上昇させるのに抵抗感がある。

教師の対応：上昇調で言うべきところを下降調にすると、不満をもっているように思われてしまうと練習する意義を説明した。

→学習者A以外は「○」の評価

学習者Aのコメント：他の人は方言話者だから（高低の音調変化が認識できるから？）こういう発音には強い。

第13回 感情とイントネーション

学習者A, Bのコメント：韓国語より日本語のほうが、イントネーションによって感情をバラエティ豊かに表現できるのでおもしろい。

8. 発音指導を通して

8.1 評価の基準

評価札を用いることに対する学生の反応は良かった。ただ、普段からよくできる人に対しては、「○」、あまりよくできない人に対しては「×」の判断に流れてしまうように感じた。つまり、学習者の中での評価基準が流動的なことがあった。その場合、教師側がクラスの雰囲気にならずに正確

に判断し、評価基準をあいまいにさせないことが必要である。また繰り返して少しでも良くなった場合は、ほめて、自信をつけさせることが大切だと思った。

8.2 学習者の方略やコメントから考えられること

評価札による学習者同士の評価後、「×」の評価を受けることによって学習者は問題がどこにあるのかを認識し、方略を考えたり、母語と比較したりして、問題が生じた原因を探っていた。このような学習者の方略やコメントから、学習者が何を原因として考えているかが分かる。

例えば、第2回の真偽の質問文では、学習者のとった方略やコメントから、学習者Cは音の長さ、学習者DとEは音の高さに着目していることが分かる。音の長さに着目していた学習者Cはその後発音は良くならなかったが、音の高さに着目していた学習者DとEは○の評価を得た。音の長さを短くすると言う方略は、伊藤(2001:76)の報告でもみられ、そこでもこの方略は失敗していた。イントネーションの練習では音の長さより高さに着目させるよう、教師がアドバイスしていく必要があるだろう。

このように、学習者の方略やコメントは教師が次にどんな指導をすべきかを考える上で、重要な情報となる。

他にも、発音指導をするためのアイデアとなるようなコメントが得られることもある。

例えば、第8, 9, 10回の授業では、日本語と一部共通する部分があることを指摘するコメントが出ている。これは学習者の母語の知識が韻律指導に応用できる可能性があることを示唆している。第10回の授業では、韓国語にも日本語と同じような文末イントネーションがあるとのコメントが出たが、その意味機能が異なっていたため、学習者に抵抗感が見られた。もし先に意味機能を説明せず、文末を上昇させたり、下降させたりする練習だけをして、その後に意味機能を説明していれば、この抵抗感はやわらいだかもしれない。

もちろん、今回の指導を通して得られたコメントはどの韓国人学習者にも当てはまるとは限らず、その裏付けをする必要はある。しかし、学習者が既に持っている知識を引き出し、それを利用することで、発音訂正が容易になるならば、試みる価値はあるだろう。

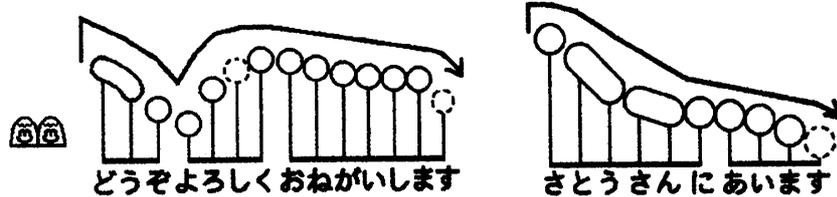
9. 今後の課題

評価札を使った相互評価を取り入れることによって、学習者から方略やコメントが多く得られた。今回のクラスは学習者が全員韓国の学生だったので、韓国語と比較する意見が述べやすかったということもあるかもしれない。しかし、このようなコメントを出し合うことで、学習者側からの情報も引き出し、それをもとに各学習者に合った指導や今後の指導のアイデアが得られるだろう。

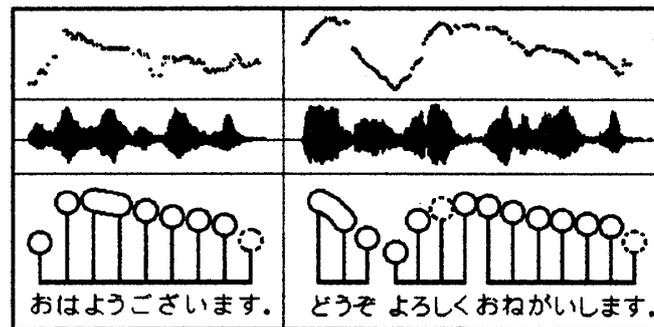
今後は、韓国以外の学習者に関してもこのような方法で発音指導を行い、どのような反応が得られるか、試みていきたいと思う。

注

- 1) 松崎・築地・串田・河野（1999）によると、「句頭のピッチ上昇から次の立て直しにいたるまでの音調のかたまり」を分かりやすく「ヤマ」と呼んでいる。例えば、「どうぞよろしくおねがいします」はヤマが2つ、「佐藤さんに会います」はヤマが1つである。



- 2) 小河原（1998）が、クラス外の学習者の発音を評価したり、学習者同士で相互に発音を評価したりして、自己あるいは学習者間共通の評価基準を作りあげていくために用いた○と×の札である。
- 3) 音声分析機を用い、音の高さを表した曲線をピッチ曲線と言う。プロソディーグラフは、串田、城生、築地、松崎、劉（1995）が音声分析機で抽出した日本語のピッチ曲線をわかりやすく視覚化したものである。以下の図は、上から順に、ピッチ曲線、波形、プロソディーグラフを示している。



参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 伊藤かな（2001）「韓国語を母語とする学習者に対する発音指導－評価札を用いて－」『岐阜大学留学生センター紀要 2001』 pp.73-80
- 小河原義朗（1997）「発音矯正場面における学習者の発音と聴き取りの関係について」『日本語教育』 92号 pp.83-94
- 小河原義朗（1998）「評価札を用いた発音指導の試み－自己モニターの促進を目指して－」『平成10年度日本語教育学会第6回研究集会予稿集』
- 小河原義朗（1999）「発音学習に関するストラテジーとその教育への応用」第1回日本語音声教育方法研究会資料
- 河野俊之・松崎寛（2001a）「体系的な音声教育とは何か－1日10分の音声教育について－」第3回日本語音声教育方法研究会資料
- 河野俊之・松崎寛（2001b）「1日10分の音声教育」『月刊日本語』2001年4月号～2002年3月号 アルク

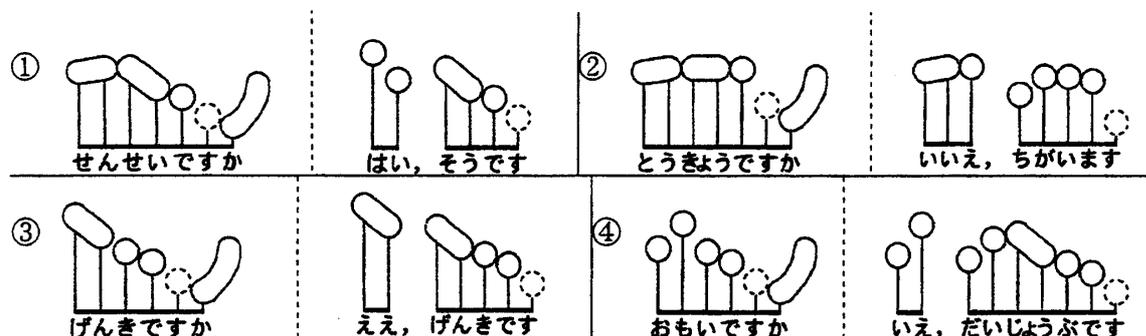
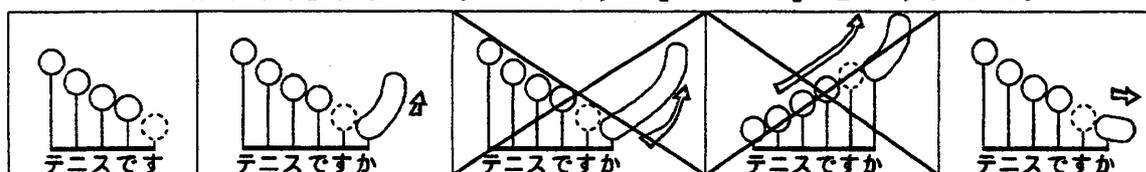
- 木村宗男・阪田雪子・窪田富男・川本喬（1989）「誤用に関する指導法」『日本語教授法』おうふう
串田真知子・城生佰太郎・築地伸美・松崎寛・劉銘傑（1995）「自然な日本語音声への効果的なア
プローチ：プロソディーグラフ」『日本語教育』86号 pp.39-51
- 佐藤友則（1995）「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育 5
号』国際交流基金 pp.139-154
- 佐藤友則（2001a）「自己モニターを利用した音声指導法－信州大学留学生センターでの実践例－」
『平成 13 年度日本語教育学会第 1 回研究集会予稿集』
- 佐藤友則（2001b）「音声指導授業の試み」第 3 回日本語音声教育方法研究会資料
- 田中真一・窪蘭晴夫（1999）『日本語の発音教室 理論と練習』くろしお出版
- 富坂容子（1997）『なめらか日本語会話』アルク
- 山本富美子・工藤嘉名子（2001）『文化系留学生のための中・上級学術日本語練習ノート 国境を
越えて〔文型・表現練習編〕』新曜社
- 柳京子（1986）「韓国人における日本語発音の言いあやまりに関する調査：おもに超分節要素につ
いて」『教育経営理論研究』7巻 pp.33-37

真偽の質問文

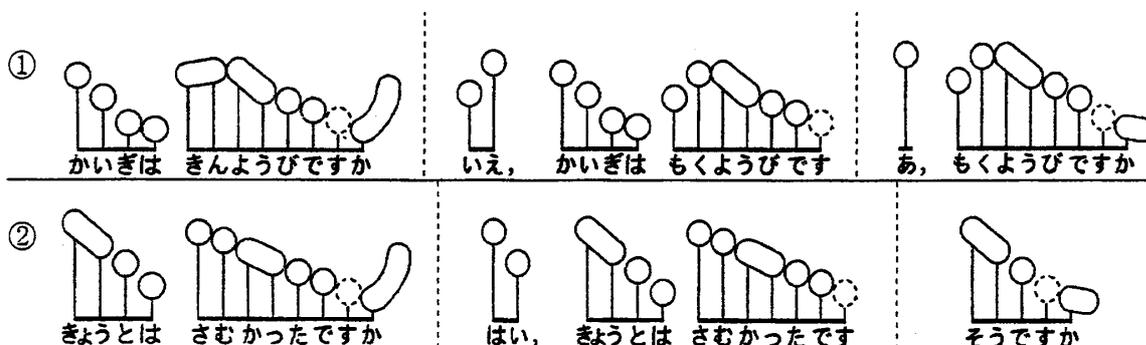
練習1 文の最後が上がる文 () には (○)、上がらない文には (×) を書いてください。

- ① () ② () ③ () ④ () ⑤ ()
 ⑥ () ⑦ () ⑧ () ⑨ () ⑩ ()

練習2 質問の「テニスですか」は最後の「か」だけを上げます。「か」を上げすぎる言い方や、だんだん上がる言い方は間違いです。わかったときの「テニスですか」は「か」を上げません。



練習3 「～は～ですか。」や「～は～です。」はヤマ2つになります。



資料2

発音

今日のテーマ 文末「よ」のイントネーション

▼次の4つの文を聞いてください。

1 もう8時だよ 子どもは早く寝なさい。

2 もう8時だよ 子どもは早く寝なさい。

3 約束の時間は8じですよ

4 約束の時間は8じですよ



1 「～よ↗」上昇 : 相手に知らせる。呼びかける。

- a: ねえ、お湯が沸いているよ↗
- b: 早く (来いよ↗ / 来てよ↗)
- c: 無理しちゃだめだよ↗
- d: もう8時だよ↗ 子どもは早く寝なさい。
- e: 道が凍ってるよ↗ 気をつけて歩くんだよ↗

2 「～よ↗」下降上昇 : 相手がそれに気づいているかどうか疑問をもっている。

- a: ねえ、さっきからお湯が沸いているよ↗ (お湯が沸いているけど、そのことに気づいてますか)
- b: あの人、ずっとこっちを見ているよ↗ (あの人がこっちを見ていることに、気づいてますか)
- c: もう8時だよ↗
- d: 道が凍ってるよ↗ 気をつけて歩くんだよ↗

3 「～よ↘」下降 : 相手と自分の認識が違って、非難、注意、訂正する。

- a: 早く (来いよ↘ / 来てよ↘)
- b: 無理しちゃだめだよ↘

- c: 約束の時間は8時ですよ、あんなに確認したじゃないですか。
- d: あっ 道が凍ってるよ、気をつけて歩くんだよ。

4 「～よへ」上昇下降 : 親しい人に使う。何かを頼んだり、許してもらったり、甘えたりするよ
うなやわらかい感じになる。

- a: こんなところで歌うなんていやだよ、はずかしいよ。
- b: え?この料理がまずい? そんなことないよ、おいしいよ。
- c: 約束の時間は8時ですよ、お願いですよ、来てくださいよ。

問題 次のマンガの「ごかいですよ」をイントネーションに注意して発音してみましょう。

- 1) ごかいですよ (五階ですよ)
- 2) ごかいですよ (誤解ですよ)



©植田まさし『すっから母さん』

田中真一・窪園晴夫 (1999) 『日本語の発音教室 理論と練習』 くろしお出版 をもとに作成。
ピッチ曲線は伊藤が作成。